

グローバル人材育成フォーラム



世界が舞台 羽ばたこう

異文化を理解し、世界で活躍できる能力を考える「グローバル人材育成フォーラム」(文部科学省グローバル人材育成推進事業・東日本第2ブロック会議主催、朝日新聞社共催)が11月24日、東京都文京区のお茶の水女子大学で開かれた。第1部では、志賀俊之・日産自動車副会長が、国際競争を勝ち抜く働き方などを話し、学生らと白熱した討論を展開。第2部は、事前選考を勝ち抜いた首都圏8大学の学生チームが「世界を変えるアイデア」をテーマに、英語のプレゼンテーションで競った。



討論

刺激的な質問を放ったのは、就職活動中という中央大の女子学生だ。「グローバル人材」という言葉が騒がれているが、独り歩きしているとも感じる。定義は何でしょうか。さわめく会場。志賀副会長は即答した。「自分の考えを持ったらうえて、世界中の異なる考え方を受け入れて共感し、違いを明確にしたうえで、ディベートしてまとめられる人」。そして、自分の意見を持つためには知識が、議論するためには語学力やコミュニケーション能力が、それぞれ必要だと答えた。

討論に先立つ基調講演では、世界規模で働く企業の厳しさを強調。その中で働くこととする若者に必要な覚悟や能力について、会場を挑発するように話した。また近年、国内の職場も多国籍化し、優秀な外国人が増えて日本人が埋没する恐れがあると指摘していた。

司会を担当した朝日新聞の安井孝之編集委員が「こんな話を聞くと、日産のようなグローバル企業に行きたい学生が激減するんじゃないですか」と会場に問いかけた。だが、多くの学生が「挑戦したい」と挙手。志賀副会長は笑顔を見せた。

「昔の日本企業は学生にそれほど高い意識や能力を求めていなかったと思う。今は酷な時代」。そう話す

「日本の強さ」だけではダメ

基調講演

会では変化に弱い。リスクをとるリーダーシップも必要だ。自動車業界も常に動いている。日産は新興国を攻めるとともに、二酸化炭素ゼロ、排出ガスゼロの電気自動車のリーダーとなる挑戦を続けている。企業としての成長にはイノベーションが不可欠。そしてイノベーションは、ダイバーシティー(多様性)の中でこそ生まれる。「あうん」の呼吸は日本の美点かもしれないが、自らの考えを発信しなければ世界では通用しない。私たちが「グローバル人財」として求めるのは、自分の考えをしっかりと持ち、その上

日産自動車は海外販売比率が87%に達し、経営会議メンバーを含む全社主要ポストの約半数が外国人だ。日本企業がグローバル競争に打ち勝つには、日本人独自の競争力を発揮させると共に、多様性を含む新たな競争力を持ち得るかが鍵になる。日本はかつてモノづくり、ヒトづくり、おもてなしという強みを生かし、廉価で高品質のものを世界中に届けた。チームで結果を出すことも得意だ。しかし世界は急激に変化し、これまでの強みだけでは勝てなくなっている。社内がみんな日本人でモノカルチャー、しかも男性社

志賀俊之・日産自動車副会長



しが・としゆき 1953年生まれ、76年大阪府立大卒、日産自動車入社。ジャカルタ事務所長、企画室長、最高執行責任者(COO)を経て、2013年から現職。

自分で考え、共感し、ディベートできる力を

グローバル人材育成推進事業 文部科学省が2012年度に開始。語学力向上、留学推進、外国人教員の増加などを進める42大学に対し、最大5年間の財政支援がある。13年度の予算規模は約45億円。

安井編集委員に対して、お茶の水女子大の2年生は「今、海外から日本に来ているのはトップクラスの人材。彼らと比べて論じるのはどうか」と聞いた。

志賀副会長が答える。「確かに昔は、新入社員をOJT(職場内訓練)で5年間ぐらいかけて育てた。だが今、外国人は会社に入る時点でプロとしての準備をしている。日本人は準備が足りない。そのことを知らず、後で皆さんが「こんなはずではなかった」と後悔して欲しくない」。だからあえて挑発的に話したと明かす。「会社に入るのだから、少なくとも英語や基本的なITスキルは身につけておいて欲しい」。フィリピンの貧困地域で活動しているという東洋大の男子学生が、グローバル競争が勝者と敗者を生み出すことについて考えを聞くと、志賀副会長は企業と社会が共に成長する「CSV」(クリエーティング・シエアード・バリュー、共有価値の創造)という考え方に触れた。米国の経営学者マイケル・ポーターが提唱する概念だ。「資本主義の中で、企業は競争しなければならぬが、社会的な貢献もできなければ存続しない。発展途上国で事業をして納税し、雇用をつくることも大切だし、大気汚染が深刻な中国で電気自動車を生産するのも社会的な責任だ」。

志賀副会長が最後に激励した。「勤勉さや、人の立場を考えながら仕事をしていくことなど、日本人の強みは大きい。東日本大震災後の復興でも、世界が驚く力を出した。学生の皆さんも、自らの潜在能力の高さに自信を持って頑張ってください」。会場を埋めた500人近い学生らから、大きな拍手が送られた。

(藤田明人)

で異なる考えを尊重し、違いを認められる人。共感力を持ち、距離を縮めながら答えを求めていく人だ。

グローバルに採用・登用を進めると、残念ながら日本人が埋もれてしまう。日本人特有の奥ゆかしさもあるだろうが、大学での勉強時間がそもそも少なく、入社時に同年代の外国人と大差がついている。でも本当は日本人ももっと勝負できるはずだ。例えばサッカーはJリーグができ、海外選手と競り合うことで格段に強くなった。グローバル競争の中で求められるのは、世界を視野に入れた若い世代の夢とあふれる意欲。現実を直視し、しっかりと有益な学生生活を送ってほしい。

参加した学生

フォーラム第2部「世界を変えるアイデア」に出場した学生は、次の通り。

【東京工業】山根拓也、付雪穂、目黒彩美、フィルダウス・ビン・アナスペクリ【杏林】李超、雨宮末真、塩野早希、村上奈々、白井美帆【法政】小城良将、岡村和樹、黒田紫陽子【創価】阿部薫子、後藤希、須藤英男、中澤清子、藤田博之【明治】岩崎洸、井川祐紀子、石田祐太【中央】田中奈央子、友定憲映、野村有希、松本幸真、鈴木雄大【芝浦工業】余明、細田駿介、山田知洋、イ・ホンウ、秋嶋俊亮【武蔵野美術】西田早苗、諏訪葵、櫻内彩美、吉富ゆい、一居萌美

拍手や共感を得られてよかった。プレゼン準備を通じてメンバーが仲良くなった」と話していた。

「等身大で考えたこと、国連の課題」講評

学生たちの発表に、石井クンツ昌子・お茶の水女子大教授▽立野純二・朝日新聞社論説副主幹(前アメリカ総局長)▽根本かおる・東京国連広報センター所長▽パワー・トーマス・G・明治大特任准教授▽本山哲人・早稲田大准教授の各講評委員が感想が述べた。根本所長は「私が初めて英語でプレゼンしたのは31歳で留学した時だった。大学時代からこうした機会

になった日本人学生と中国、マレーシアからの留学生の計4人のチーム。発表後「緊張したが、皆さんの

指し、各国のファーストレディーが集まって交流するキャンプの実現を訴えた。明治大は、みんなの「幸せ」を、スマートフォンで多くの人が共有する構想をユーモアたっぷりに話し、笑いを誘った。

普段学んでいるテーマを生かした企画もあった。武蔵野美術大は、各国の子どもが同じテーマで絵を描く様子を映像中継で共有し、異なる文化を体感する試みをプレゼン。中央大は、地球環境問題を学ぶメンバーが出演し、消費者に安全な食べ物を届ける方法を発表した。

東京工業大は、人間の体に発電装置を取り付け、歩行などの活動によってエネルギーを生み出す構想を提案した。英語で行われる講義で一緒

「世界変えるアイデア」英語で披露

大学交流SNS・共同生活配信…

8大学の学生らは、映像や音楽、寸劇など多彩な表現方法を駆使し、鍛え上げた英語のプレゼンテーションで会場を沸かせた。

目立ったのは、国境を超えた相互理解への熱意だ。芝浦工業大は、世界中の大学が交流できる独自のSNSを、法政大は、異なる国の青少年が国際問題を柔軟に話し合う衛星対話授業をそれぞれ提案。創価大は、全ての国連加盟国から学生が集まって共同生活をし、価値観が衝突する過程をネット配信する企画を発表した。杏林大は、戦争をなくすことを目



アートを通じた国際交流を提案する武蔵野美術大の学生たち